

2023年7月16日（日）

老球の細道741号

日本の伝説の名コーチ「吉井四郎」のフィロソフィー

会津バスケットボール協会 室井 富仁

元全日本監督、筑波大監督を務めた笠原成元氏がかつて相双地区を訪れ、講習会を行ったことがある。その時代相双地区協会の会長であった松井遵一郎氏が笠原氏に「世界でNO1のコーチは誰だと思いますか」と質問した。笠原氏は迷わず「日本の吉井四郎である」と答えたという。故吉井氏は1964年東京五輪日本代表の監督等を務めた。

私より上の世代のコーチは皆、吉井四郎氏の技術書によって指導をしてきたと思う。緻密な理論を系統的にわかりやすくまとめられた著書はバスケットボールのバイブルと言っても過言ではない。今でも吉井氏の理論を越える本には出会ったことがない。

私が教員チームの選手時代に講習会で直接吉井氏の指導を受け、夜の懇親会でもここぞとばかり隣に座って色々な質問をした。今思うと凄い体験であった。

温故知新。教員時代書いていた指導覚書『ホルムルーデンス』を読み返していたら、2009年月刊バスケットボール10月号に吉井氏の色々なコンセプトがまとめられていた。

【コーチングに対する考え方】

「信ずるもの」を指導し、「知ったもの」を採用せよ。コーチは少年たちによって具現されるべきモデルでなければならない。

【勝利に対する考え方】

- ①コーチは勝者になることを欲しなければならない。どのようなゲームでも、勝つチャンスがあることをコーチ自身が信じなければならない。
- ②伝統的に強いチームならば、プライドによって次の年も成功なチームは作れる。
- ③幸運をつかむ。幸運とは偶然に来るものではなくて、準備したものが、たまたまそれを発揮する機会を持つところに来るものである。
- ④ゲームにおける勝利がコーチングの目的ではないが、勝利を得ることによって、はじめて達成されるコーチングの目的が莫大にある。
- ⑤コーチはゲームの指導を通してプレイヤーの人間形成を考える責任がある。

【敗戦に対する考え方】

コーチは負けた時のほうが多くを学ぶ。負けた時こそコーチのリーダーシップが試される。それによって、チームが分裂するか、更に向上するために結束するかの分岐点となる。

【外部の圧力に対する態度】

自分自身の考えで最上であると考えるものを正直に実行すること。自分の信念に基づく指導方針を忠実に実行することに例外を持たない。

【人間関係に対する考え方】

プレイヤー間の理想的な関係とは、彼等が個人的な利己心を捨てて、チームのために働き、彼らの一人の成功をすべての者の成功であると感じるようになるという関係。